

益軒十訓

上

昭和三年三月十五日印刷
昭和三年三月十八日發行

有朋堂文庫
益軒十訓上
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼發行

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

本書の著者貝原益軒は、筑前福岡の人、寛永七年に生れ、正徳四年に没す。彼は當時山崎闇齋、松永尺五、木下順庵等儒學の材能輩出せる間に在りて、覇を一方に唱へたる一代の碩儒たりしのみならず、忠誠篤實の社會教育家なりき。本書收むる所の諸篇は、何れも彼が晩年の述作に係り、所説堅實丁寧、千古の下よく世道人心を維持するに足る者あり、文章亦穩健にして、一種の氣品を具ふ。

上卷收むる者六種、其著作の年代次の如し。

家訓	一卷	貞享四年	五十八歳
君子訓	三卷	元祿十六年	七十四歳
大和俗訓	八卷	寶永五年	七十九歳
樂訓	三卷	寶永七年	八十一歳

緒言

一

益軒十訓

二

和俗童子訓 五卷 寶永七年 八十一歳
五常訓 五卷 正徳元年 八十二歳

以上の諸書、何れも初版若しくは再刻の木版本により、本叢書復刻の一般方針にとづきて、假名遣を一定し、振假名を補ひ、句讀點を施したる外、原本の語法及振假名等は、成べく改竄を加へざる事となしたり。

明治四十四年二月

校訂者 塚本 哲 三

和俗童子訓序

君子慎_{ハム}始_ヲ。差_フ若_シ毫釐_{ナレハルニ}繆_ニ以_テ千里_ヲ。是以_テ古人生_テ子_ヲ能_ク食_ヒ能_ク言_{ツテ}而_エ教_ニ之_ニ。聖人立_ニ小學之法_ヲ。而養_{フニ}蒙以_テ正_ヲ者誠有_{ハニ}以_{ユヘ}也。蓋嬰孩之歲人生之始也。是性相近而未_レ有_レ習之時。雖_ニ知思未_レ發_ヲ。其爲_シ善爲_シ惡之岐從_レ此而分矣。辨_{ヘテ}其毫釐之邪正_ヲ。而導_{グニ}之以_テ善者宜於_ス此焉。是所以慎_ヲ始_ヲ也。苟論_シ教之不早_{カラ}。年稍長則內爲_ニ嗜好_ノ所_ル陷溺_セ。外爲_ニ流俗_ノ所_ル誘惑_セ。人欲肆而天理滅矣。貿貿焉莫_シ知_ラ所_ヲ之_ヲ。欲_レ不_レ歸_ニ小人之趣_ニ不_レ可_レ得_レ已_ト。此非_ニ繆_{ルニ}以_テ千里_ヲ乎。故教_レ人之法。以_レ豫爲_レ急_ト。後世民間小兒之輩蒙養不_レ正。其平日所_ニ見聞習熟_{スル}皆是戕_シ賊德性_ヲ。蔑_ニ棄禮法_ヲ之事而已。予於_レ此乎。不_ニ自揣_ラ借_テ率_ヲ。取_テ古人訓_ニ子弟之意_ヲ書_{スルニ}以_テ國字_ヲ。欲_レ便_ニ窮鄉村童之無_レ師無_レ聖者之玩讀_ニ也。顧昏耄之齒不_レ能_レ爲_ニ文理_ヲ。恐_レ不_レ足_レ曉諭_{スルニ}童蒙_ヲ而已矣。有_レ志之君子改作惟幸_{ナラン}。

寶永七庚寅初夏日

益軒 貝原篤信書

和俗童子訓

貝原益軒 著

卷之一

○總論上

一若^{わか}き時ははかなくて過ぎ、今^{いま}老^{おい}いて死^しなざれば盜^{ぬす}人^{びと}とする、ひじりの御^{おん}いましめ、逃^{のが}れ難^{がた}けれど、今年^{ことし}既^{すで}に八^やそぢに至^{いた}りて、罪^{つみ}を加^くへざる年^{とし}にもなりぬれば、かゝる不^ふ用^{よう}なるよしなし言^{こと}いひ出^いさせる罪^{つみ}をも、願^{ねが}はくは世^よの人^{ひと}是^{こゝ}を免^{ゆる}し給^{たま}へ。年^{とし}の積^{つも}りに、世^よの中^{なか}の有^あ様^{さま}多^{おほ}く見^み聞^{きこ}して、兎^う角^{かく}思^{おも}ひ知^しり行^いくにつけて考^{かん}へ見るに、凡^{おほ}人^とは善^よき事^{こと}も惡^{わる}しき事^{こと}も、いさ知^しらざる幼^いき時^{とき}より習^なひなれぬれば、まづ入^いりし事^{こと}、内^{うち}に主^{あるじ}として、既^{すで}に其^{その}性^{せい}と成^{なり}ては、後^{のち}にまた善^よき事^{こと}あしき事^{こと}を見^み聞^{きこ}してもうつり難^{がた}ければ、幼^いき時^{とき}より、早^{はや}く善^よき人^{ひと}に近^{ちか}づき、善^よき道^{みち}を教^{おし}ふべき事^{こと}にこそあれ。墨^{ぼく}子^しが白^{しろ}き絲^{いと}の染^そるを悲^{かな}し

盜人とする
論語憲問
篇に、幼に
して孫弟な
らず、長じ
て述ぶるこ
と無く、老
いて死な
ず、是を賊
となす

罪を加へざる年一八十九十をいふ、前註、五〇頁参照

高きに登るには云々中庸に、君子の道は譬へば遠きに行くに必ず遜きよりするが如し譬へば高きに登るに必ず卑きよりするが如し食にあき云々孟子滕文公上に、

みけるも、むべなるかな。此故に、郷里の兒童の輩を早くさとさん爲に、いさゝか昔聞ける所を、筆に任せて記し侍る。かゝる賤しき書づくり、ひがごと聞えんは、いと恥づべけれど、高きに登るには、必ひきよりする理あれば、もしくは未だ學ばざる幼稚の小補にもなりなかと云ふ事しかり。

一凡人となれるものは、皆天地の徳をうけ、心に仁義禮智信の五性を生れつきたれば、其性のまゝに隨へば、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫の道行はる。是人の萬物に勝れて尊き所なり。是を以て、人は萬物の靈と云へるなるべし。靈とは、萬物に勝れて明なる智あるを云へり。されども、食にあき、衣をあたゝかに著、居所を安くするのみにて、人倫の教なければ、人の道を知らず、禽獸に近くして、萬物の靈と云へるしるしなし。古の聖人は是を憂ひ、師を立て、學び所を立て、天下の人に、幼き時より道を教へ給ひしかば、人の道立ちて、禽獸に近きことを免る。凡人の小なる業も、皆師なく教なくしては、自らは爲し難し。況や人の大なる道は、古のさばかり賢き人といへど、學ばずして自らは知り難くて、皆聖人を師として學べり。今の人、いかでか教なくして一人知るべきや。聖人は人の至、萬世の師なり。されば人は、聖人

人の道有るや飽食暖衣逸居し、教無きときは則ち禽獸に近し聖人之を憂ふる有り契を以て司徒たらしめ教ふるに人倫を以てす云々

の教なくては、人の道を知り難し。是を以て、人となる者は、必聖人の道を學ばずんばあるべからず。其教は、豫、するを先とす。豫とは、兼てよりと云ふ意、小兒のいまだ惡に移らざる先に、兼て早く教へずして、惡しき事に染みならひて後は、教へても善に移らず、いましめても惡を止め難し。古人は、小兒の始てよく食し、能く

言ふ時より、早く教へしとなり。富貴の家には、能き人を擇びて、早く其子につくべし。惡しき人になれそむべからず。貧家の子も、早く善き友に交らしめ、あしき事に習はしむべからず。凡小兒は、早く教ふると、左右の人をえらぶと、是古人の子を育つる良法なり。必是を法とすべし。

一凡小兒を育つるには、始て生れたる時、乳母を求むるに、必溫和にして愼み、まめやかに詞少き者をえらぶべし。乳母の外、附き隨ふ者をえらぶも、大やう斯の如くなるべし。始て飯を喰ひ、ものを言ひ、人の面を見て悦びいかる心を知る時より、常に其事に隨ひて、時々教ふれば、やゝおとなしく成りて、いましむる事易し。故に幼き時より、早く教ふべし。もし教へいましむる事おそくして、惡しき事をおほく見習ひ聞



まめやかに誠實にして、忠實にして等の意

やんごとなき止む事
無き義にて
貴きないふ
非をそだて
しめの意
そらうち
打つ眞似な

習ひ、くせになり僻事出来て後、教へいましむれども、始より心にそみ入りたる悪しき事、心の内に早くあるじとなりぬれば、あらためて善に移ること難し。たとへば小兒の手習するに、始風體あしき手本を習へば、後に能き手をならひても移り難く、一生改め難きがごとし。第一いつはれる事、次に氣隨にてほしいまゝなる事を、早くいましめて、必いつはり恣なる事をゆるすべからず。やんごとなき大家の子は、殊に早くいましめ教へざれば、年長じては、勢強く位高くして、諫め難し。凡小兒のあしくなりぬるは、父母乳母かしづきなるゝ人の、教の道知らずして、其あしき事をゆるし、したがひほめて、其子の本性を害ふ故なり。或は暫く泣く聲を止めんとて、あざむきすかして、姑息の愛をなす。其事誠ならざれば、則是偽を教ふるなり。又たはぶれに恐しき事どもを云聞かせ、よりくおどしいるれば、後に臆病の癖となる。武士の子は、殊に是をいましむべし。幽霊、ばけもの、怪く誠なき物語、必いましめて聞かしむべからず。或は小兒の氣にさからひたる者をば、理をまけて小兒の非をそだて、そらうちなどすれば、驕慢の心いでくるものなり。小兒をもてあそびて、我が心を慰めんが爲に、様々の詞にて、そびやかし苦め、いかり争はしめて、ひがみまがれる心を

どするを云ふ、そらは偽の義也

つけ、貪りねたむ心ざしを引出す。しかのみならず、父母の愛過ぐる故、あまえて父母を恐れず、兄を蔑にし、家人を苦め、よろづ恣にして人を侮る。いましむべき事をかへりてすゝめ、咎むべき事をかへりて笑ひ悦び、色々あしき事どもを見聞かせ、言ひならはせ、しならはせて、やうやく年長じ、智恵いでくる時に至りて、俄に始ていましむれども、其惡しきならはし、年と共に長じ、久しくならひ染みて、本性も等しくなりたれば、諫を用ひず。幼き時に教なく、年長じて俄に諫むれども隨はざれば、本性惡しく生れつきたるとのみ思ふ事、いとおろかに、まどひの深き事ならずや。

古語に云々
一保嬰論に
若し小兒の



一凡小兒を育つるに、初生より愛を過すべからず。愛過ぐれば、かへりて子をそこなふ。衣服をあつくし、乳食にあかしむれば、必病多し。衣を薄くし、食を少くすれば、病少なし。富貴の家の子は、病多くして身よわく、貧賤の家の子は、病少なくて身強きを以て、其故を知るべし。小兒の初生には、父母の古き衣を改めぬひて、著せしむべし。衣のあたらしくして温なるは、熱を生じて病となる。古語に、凡小兒を安からしむるには、三分の飢と寒とをおぶべしと云へり。三分とは、十の内三分を云ふ。此

安きを要めば須く三分の饑と寒とを帶ぶべし此攝生の要也終身之を守りて可也



聞えつるやうに述べるが如くにの意

意は、少しは飢し、少しは冷すがよしとなり。是古人小兒を保つの良法なり。世俗是を知らず。小兒に乳食を多く與へてあかしめ、甘き物果物を多く食はしむる故に、氣ふさがりて、必脾胃を破り、病を生ず。小兒の不慮に死する者は、多くは是によれり。また衣をあつくして溫め過せば、熱を生じ、元氣をもらすゆゑ、筋骨ゆるまりて、身弱し、皆是病を生ずるの本なり。唐も大和も、古より童子の衣の脇をあくるは、童子は氣さかんにして、熱多きゆゑ、熱をもらさんが爲なり。是を以て、小兒は溫め過すが惡しき事を知るべし。天氣よき時は、をりく外に出して、風日にあたらしむべし。斯の如くすれば、はだへ堅く、血氣強くなりて、風寒に感ぜず。風日にあたられれば、膚もろくして、風寒に感じ易く、わづらひ多し。小兒の養ひの法を、かしづき育つる者に、能くいひ聞かせ教へて、心得しむべし

一 小兒を育つるには、前に聞えつるやうに、先乳母かしづき隨ふものをえらぶべし。心穩にして邪なく、慎み、言少なきをよしとす。わるがしこく口き、僞をいひ、詞多く、心邪にして僻み、氣猛く、恣にふるまひ、酩酊を好むを惡しとす。凡小兒は智なし。心も詞も萬の振舞も、皆其かしづき隨ふ者を見習ひ聞きならひて、彼に似

するものなり。乳母かしづき隨ふ人惡しければ、育つる子、それに似て惡しくなる故に、其人をよくえらぶべし。貧賤なる家には、人をえらぶ事難しといへど、此心得有るべし。況や位高く祿とめる家をや。

一 凡小兒を育つるには、専ら義方の教をなすべし。姑息の愛をなすべからず。義方の教とは、義理の正しき事を以て、小兒のあしき事をいましむるを云ふ。是後の福となる。姑息とは、婦人の小兒を育つるは、愛に過ぎて、小兒の心に隨ひ、氣にあふを云ふ。これ、必後の禍となる。幼き時より、早く氣隨をおさへて、私欲をゆるすべからず。愛を過せば、驕出來其子のため禍となる。

一 凡子を教ふるには、父母嚴にきびしければ、子たる者おそれ慎みて、親の教を聞きてそむかず。是を以て孝の道行はる。父母やはらかにして嚴ならず、愛過ぐれば、子たる者父母を恐れずして、教行はれず、いましめを守らず。是を以て、父母を侮りて孝の道立たず。婦人又は愚なる人は、子を育つる道を知らず、常に子をおごらしめ、氣隨なるをいましめざる故、其おごり年の長するにしたがひていよく増す。凡夫は心くらくして、子に迷ひ、愛におほれて、其子の惡しき事を知らず。古歌に、

姑息—禮記檀弓に君子の人を愛するや徳を以てし細人の人を愛するや姑息を以てすと見えたり、姑息は苟且といふに同じく唯目前の安を偷むをいふ

人の親の―
藤原兼輔の
詠にして後
撰集に出づ
其子の惡し
きを云々―
大學に、諺
にこれ有り
人其子の惡
しきを知る
莫し其苗の
碩なるを知
る莫し

まどしくば

人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道にまよひぬるかな。

とよめり。唐土の諺に、人其子の惡しきを知る事なしと云へるが如し。姑息の愛過ぐれば、たとひ惡しき事を見つけても、ゆるしてしましめず。凡人の親となるものは、我が子にまさる實なしと思へど、其子の惡しき方に移りて後は、身を失ふ事をも、かねて辨へず、居ながら其子の惡におち入るを見れども、我が教なくして、惡しくなりたる事をば知らで、唯子の幸なきとのみ思へり。又其母は、子の惡しき事を父に知らせず、常に子のあやまちをおほひ隠すゆゑ、父は其子のあしきを知らで、いましめざれば、惡つひに長じて、一生不肖の子となり、或は家と身とを保たず。あさましき事ならずや。程子の母の曰、子の不肖なるゆゑは、母其あやまちをおほひて、父知らざるによりりと云へるもむべなり。

一 小兒の時より、早く父母兄長に事へ、賓客に對して、禮を勤め、讀書、手習、藝能を勤めまなびて、惡しき方に移るべきいとまなく苦勞さすべし。はかなき遊にひまを費さしめて、ならはし惡しくすべからず。衣服、飲食、器物、居處、僕從に至るまで、其家の位よりまどしくばうそくにして、もてなしうすく、心のまゝならざるがよし。

うそくに
て―貧しく
不足勝にし
て、乏しく
不十分に
し等の意

幼き時艱難に習へば、年たけて難苦に堪へやすく、忠孝の勤を苦まず、病少なく驕なくして、放逸ならず。能く家を保ちて、一生の間、幸となり、後の樂多し。もし不意の變にあひ、貧窮に至り、或は戦場に出でても、身の苦なし。斯の如く子を育つるは、誠によく子を愛するなり。又幼少より養豊かにして、もてなしあつく、心のまゝにして安樂なれば、おごりにならひ、私慾多くして、病多く、艱難に堪へず、父母に事へ君に仕ふるに、勤を苦みて、忠孝も行ひ難く、學問藝能の勤成り難し。もし變にあへば、苦にたへず、陣中に久しく居ては、艱苦をこらへ難くして、病を受け、戦場に臨みては、心に武勇ありても、其身やはらかにして、攻め戦ひのはげしき勳成り難く、人に後れて功名をもち難し。又男子唯一人あれば、極めて愛重すべし。愛重するの道は、教へいましめて、其子に苦勞をさせて、後のためよく、無病にてわざはひなきやうに計るべし。姑息の愛をなして其子を損ふは、誠に愛を知らざるなり。およそ人は若き時艱難苦勞をして、忠孝を勤め、學問を勵まし、藝能を學ぶべし。斯の如くすれば、必人にまさりて、名をあげ、身を立て、後の樂多し。若き時安樂にて、なす事なく、艱苦を経ざれば、後年に至りて人に及ばず、又後の樂なし。

信を失へば人にあらず
論語爲政篇に、人にして信なくんば其可なるを知らず、大車輓なく小車輓無くんば其れ何を以て之を行らん

一幼き時より、心ことばに、忠信を主として、偽なからしむべし。もし人をあざむき、偽をいはゞ、厳しくいましむべし。こなたよりも、幼子を欺きて、偽を教ふべからず。こなたより偽れば、小兒是に習ふものなり。かりそめにも偽をいふは、人にあらずと思ふべし。心に偽と知りながら、心を欺くは、其罪いよく深し。又人と約したる事あらば、必其約を違へざるべし。約を違へては偽となり、信を失へば人にあらず。もし後に信を守り難き事は、初より約すべからず。又小兒には、利欲を教へ知らしむべからず。よろづにさとくとも、偽りて且慾深く、人の物をむさほるは、小人のわざなれば、幼き時より、早く是を戒むべし。ゆるすべからず。

一小兒の時より、心もちやはらかに、人をいつくしみ、情ありて、人を苦めあなどらず、常に善を好み、人を愛し、仁を行ふを以て、志とすべし。人我が心になはざるのとて、顔色をはけしくし、詞をあらくして、人を怒り罵るべからず。小兒もし不仁にして、人を苦め侮りて情なくば、早くいましむべし。人に對して溫和なれども、其身正しければ、幼きとて人侮らず。

一凡小兒の教は早くすべし。然るに凡俗の智なき人は、小兒を早く教ふれば、氣くじけ

先入の言―漢書息夫躬傳に、古戒を觀覽し反覆參考先入の語を以て主と爲す無し

兩葉不去云―木生じ出でたるばかりの時抜き去らざればやがて大木となりては斧柯を用ひて伐らざるべからざるに至るの意、戰國策

てあしむ、唯其心に任せて置くべし。後に智恵出來れば、ひとりよくなると言ふ。これ必愚なる人の言ふことなり。此言大なる妨なり。古人は、小兒のはじめて能く食し、ものいふ時より、早く教ふ。遅く教ふれば、惡しき事を久しく見聞きて、先入の言、心の内に早く主となりては、後に善き事を教ふれどもうつらず。故に早く教ふれば入り易し。常に善き事を見せしめ聞かしめて、善き事にそみ習はしむべし。おのづから善にすくみやすし。惡しき事も、少しなる時早くいましむれば、去り易し、惡長じては、去り難し。古語に、兩葉不去將用斧柯といへるがごとし。婦人及び無學の俗人は、小兒を愛する道を知らず、姑息のみにして、唯うまきものを多く食はせ、よき衣をあたゝかに著せ、ほしいまゝに育つるをのみ、其子を愛すると思へり。是人の子をそこなふわざなる事を知らず。今の世にも、其父禮を好みて、其子の幼き時より、しつけを教へ、和禮をならはする人の子は、必其子の作法よく、立居ふるまひ、人の交不束ならず、老に至るまで威儀よし。是其父早く教へし力なり。善を早く教へ行はしむるも、其しるしまた斯の如くなるべし。

一幼き時より、必まづ其好むわざをえらぶべし。好む所尤大事なり。姪慾の戲を好み、

に、縁々を絶たずんば蔓々を若何せん、毫末抜かずんば將に斧柯を成さんとす一向に一ひたすらに、一途になど云ふに同じ

淫樂などを好む事、又つひえ多き遊、先早くいましむべし。是を好めば、其心必放逸になる。幼きより好めば、其心癖となり、一生、其好やまざるものなり。いかにいとけなくして、いまだ心に辨なくとも、又富貴の家に生れ、萬の事心になへりと、道に背き、人に害あり、物を苦め、財を費す戲遊の、はかなきわざをば、せざる理なりと云ひ聞かせ、悟らしめて、なさしむべからず。又我が身に用なき無益の藝を習はしむべからず。たとひ用ある藝能といへども、一向に好み過して、其事にのみ心を用ふれば、必其一事に心傾きて、萬事に通ぜず、其好む所につきて、ひが事多し。況や益なき事をすき好むをや。およそ幼きより、好む所習ふ事を、早くえらぶべし。

一 小兒の時より、年長するに至るまで、父となり、かしづきとなる者、子のすき好む事ごとに心をつけて、えらびて好に任すべからず。好む所に打任せて、善惡をえらばざれば、多くは惡しきすぢに入りて、後はくせとなる。一たび惡しき方にうつりては、取返してよき方にうつらず、いましめても改まらず、一生の間止み難し。故に未だ染まざる内に、早くいましむべし。油斷して、其子の好む所に任すべからず。殊に高家



破魔弓一昔小兒の息災を祈らんがために正月室内に飾りたる弓矢を云ふ、今日にても其儀の存する地ありとぞ、こゝなるは單に遊戲の具を云へりと覺ゆ天兒一兒女の災を移し負はする呪に用ふる木

の子は、物事豊かに自由なる故に、好む方に心早くうつり易くして、おほれ易し。早くいましめざれば、後にそみ入りては、諫め難く、立歸り難し。又惡しからざる事も、勝れて深く好む事は、必害となる。故に子を育つるには、油斷して其好に任すべからず。早くいましむべし。おろそかにすべからず。豫するを先とするは、此故也。

一 小兒の時、紙鳶をあげ、破魔弓を射、狛をまはし、毬打の玉を打ち、てまりをつき、端午に旗人形を立つる、女兒の羽子をつき、天兒をいだき、雛をもてあそぶの類は、ただ幼き時好めるはかなき戲にて、年漸く長じて後は、必捨るものなれば、心術に於て害なし。大やう其好に任すべし。されど、費多く、かざり過し、好み過さば、戒むべし。ばくちに似たる遊は、なさしむべからず。小兒の遊を好むは、常の情なり。道に害なき業ならば、あながちに抑へかゝめて、其氣を屈せしむべからず。唯後にすたらざる遊好は、打任せ難し。

一 禮は天地の常にして、人の則なり。即人の作法を云へり。禮なければ、人間の作法にあらず。禽獸に同じ。故に幼より禮をつくしみて守るべし。人のわざ、事ごとに皆禮あり。萬の事、禮あればすぢめよくして行はれ易く、心も亦定りて安し。禮なけ

偶の稱なれど、こゝは單に人形のことを見ゆ

れば、筋目違ひ亂れて行はれず、心も亦安からず。故に禮を行はずんばあるべからず。小兒の時より、和禮の法に従ひて、立居振舞飲食酒茶の禮、拜禮など教ふべし。一志は、虚邪なく、言は忠信にして偽なく、又非禮の事、賤しき事を言はず、形の威儀を正し慎む事を教ふべし。又諸人に交るに、溫恭ならしむべし。溫恭はやほかにうやまふなり。是善を行ふ初なり。心あらかきは溫にあらず、無禮なるは恭にあらず。己を是とし、人を非として侮る事を、堅く戒むべし。高位なりとて、我を高ぶる事なかれ。高き人は、人にへりくだるを以て道とすることを教ふべし。氣隨にして我がまゝなることを、早くいましむべし。かりそめにも人を謗り、我が身におごらしむる事なかれ。常にかやうのことを早く教へ戒むべし。一およそ人の惡徳は矜なり。矜とはほこるとよむ。高慢の事なり。矜なれば自ら是として、其惡を知らず、過を聞きても改めず。故に惡を改めて善に進むこと難し。たとひ勝れたる才能ありとも、高慢にして、我が才にほこり、人を侮らば、是凶惡の人といふべし。凡小兒の善行あると、才能あるをほむべからず。ほむれば高慢になりて、心術をそこなひ、我が愚なるも不徳なるをも知らず。我に智ありと思ひ、我が才智に

篤信一著者
貝原益軒の
本名

ても事足りぬと思ひ、學問を好まず、人の教を求めず。もし父として、愛に溺れて子の惡しきを知らず、性行よからざれども、君子のごとくほめ、才藝つたなければども、勝れたりとはむるは、愚にまよへるなり。其善を譽むれば其善を失ひ、其藝を譽むれば其藝を失ふ。必其子をほむる事なかれ。其子の害となるのみならず、人にも愚なりと思はれて、いと口をし。親の譽むる子は、多くは惡しくなり、學も藝も拙きものなり。篤信かつて言へり、人に三愚あり、我をほめ、子をほめ、妻をほむる、皆是愛におほるゝなり。

一小兒に學問を教ふるに、初より人品よき師を求むべし。才學ありとも、惡しき師に隨はしむべからず。師は小兒の見習ふ所の手本なればなり。凡學問は、其學術をえらぶことをむねとすべし。學のすぢ惡しければ、かへりて性をそこなふ。一生勤めても、よき道に進まず。一度惡しきすぢを學べば、後によき術を聞きてもうつらず。又才力ありて高慢なる人、すぢわるき學問をすれば、善にうつらざるのみならず、必邪智を長じて、人品いよく惡しくなるものなり。かやうの人には、唯小學の法、謙讓にして自ら是とせざるを以て、教を受くるの基となさしめて、溫和慈愛を心法とし、孝弟



忠信・謙恥の行を教へて、高慢の氣をくじくべし。其外人によりて、多才は、かへりて其心をそこなひ、凶惡をますものなり。まづ謙讓を教へて、後に才學を習はしむべし。

一子弟を教ふるには、まづ其交る所の友をえらぶを要とすべし。其子の生れつきよく、父の教正しくとも、放逸なる無頼の小人に交りて、それと往來すれば、必彼に引そこなはれて悪しくなる。況や其子の性質善からざるをや。古人の語に、年若き子弟たとひ年を終るまで書を讀ますとも、一日小人に交るべからずと云へり。一年書を讀まざるは、甚惡しけれども、猶それよりも、一日小人に交るは惡しき事となり。是惡しき友の甚害ある事を云へり。人の善惡は、皆友によれり。古語に曰、麻の中なる蓬は、助けざれども自ら直し。又曰、朱に交れば赤し、墨に近づけば黒しといふ事、誠にしかり。若き時は、血氣未だ定らず、見る事聞く事にうつり易きゆゑ、友あしければ、惡にうつる事早し。もろこしにて、公義の法度を恐れず、我が家業を勤めざる者を無頼と云ふ。是放逸にして、父兄の教にしたがはざるいたづらものなり。無頼の小人は、必酒色と淫樂を好み、又博奕を好みて、諫を防ぎ恥を知らず、友を引そこな

麻の中なる蓬―荀子勸學篇に、蓬麻中に生ずれば扶けずして自ら直し
朱に交れば赤し―前註

二五一頁參照

拳法―柔術をいふ

大人―大徳の人又聖人の義なれど

ふ者なり。必其子を戒めて、彼に交らしむべからず。一度是と交りて、其風に移りぬれば、親の戒世の謗をも恐れず。とがを犯し、わざはひにあへども顧みず。もし幸にしてわざはひに免るといへども、大不孝の罪におち入りて、惡名を流す。わざはひを免れざる者は、一生の身を失ひ、家を破る。悲しむべきかな。

一四民ともに、其子の幼きより、父兄君長に事ふる禮儀作法を教へ、聖經を讀ましめ、仁義の道理を漸くさとさしむべし。是根本をつとむるなり。次に、ものかき算數を習はしむべし。武士の子には、學問のひまに、弓馬劍戟拳法など習はしむべし。但一向に藝を好みすぎすべからず。必一事に心移りぬれば、其事におほれて害となる。學問に志ある人も、藝を好み過せば、其方に心傾きて、學問すたる。學問は、專一ならざれば進み難し。藝は學問を勤めて、其いとま有る時の餘事なり。學問と藝術を同じたぐひに思へる人あり、本末輕重を知らず、愚なりと云ふべし。學問は本なり、藝術は末なり。本は重くして、末は輕し。本末を同じくすべからず。後世の人、此理を知らず。悲しむべし。殊に大人は、身を修め人を治むる稽古にあらば、藝能は其下たる有司にゆだねても事缺けず。されど六藝は、大人といへど其大略をば學ぶべし。

轉じて上官
高位の人の
義にいふ、
こゝなるも
然り
六藝—禮樂
射御書數の
六也

入を計りて
—禮記王制
に三十年の
通を以て國
用を制し入
るを量つて
以て出づる
を爲すと見
え、又歐文

また軍學武藝のみありて、學問なく義理を知らざれば、習ふ所の武事、かへりて不忠不義の助となる。然れば、義理の學問を本とし重んずべし。藝術は誠に末なり。六藝の中、ものかき算數を知る事は、殊に貴賤四民ともに習はしむべし。物よくいひ、世になれたる人も、物を書くこと達者ならず、文字を知らざれば、かたことをいひ、ふつつかに賤しくて、人に見おとされ、侮り笑はるゝは口をし。そのみならず、文字を知らざれば、世間の事と詞に通ぜず、もろくの勤に應じ難くて、世事滯る事のみ多し。又日本にては、算數は賤しき業なりとて、大家の子には教へず。是國俗のあやまり、世の人の心得違へるなり。もろこしにて、古は天子より庶人まで、幼少より皆算數を習はしむ。大人も、國郡にあらゆる民數を計り、其年の土貢の入を計りて、來年出し用ふる分量を定めざれば、限なき欲に隨ひて、限ある財盡きぬれば、困窮に至る。是算を知らざればなり。又國土の人民の數を計り、米穀金銀の多少と、軍陣に人馬の數と糧食とをかんがへ、道里の遠近と、運送の勞費を計り、人數をたて、軍をやるも、みな算數を知らざれば行ひ難し。臣下に任せては、おろそかにして事違ふゆゑに、大人の子は、殊に自ら算數を知らずでは、つとめにくとく、事缺くる事多し。是

食貨志論に
も其入を量
つて之を出
すといへり



散樂—雅樂
ならざる滑
稽鄙野の音
樂をいふ

飛驒工うつ
墨繩の—一
筋といふた

日用の切要なる事にして、必習ひ知るべき業なり。近世或君の仰に、大人の子の學びて宜しき藝は何事ぞと問ひ給ひしに、其臣答へて、算數をならひ給ひてよろしかるべしと申されける、いと宜しき答なりけると語り傳ふ。凡高きもひきくも、算數を知らずして、我が財祿のかぎりを考へず、みだりに財を用ひ盡して、困窮に至るも、又事に臨みて、算を知らず、利害を考ふる事も成り難きは、いとはかなき事なり。又音樂をも頗る學び、其心を和け樂むべし。されど、專好めば心すさむ。幼少より遊戯の事に心を移さしむべからず。必制すべし。唐土の音樂だにも、好み過せば心をとらかす。況や日本の俗に、翫ぶ散樂は、其章歌いやしく、道理なくして、人の教とならざるをや。藝能其外遊戯の方に心うつりぬれば、道の志は、必ずたるものなり。專一ならざれば、直に遂ぐることも能はずとて、學問し道を學ぶには、專一に勤めざれば、多岐の迷とて、あなたこなたに心うつりて、よき方に行きと、かざるものなり。專一にするは、人丸の歌に、
とにかくに物は思はず、飛驒工うつ墨繩の唯一すぢに。
とよめるが如くなるべし。

めの序也、
前註三一八
頁参照

いたづがは
し―苦痛な
り、厄介な
りなど云ふ
程の意

一富貴の家の子に生れては、幼き時より、世のもてなし人の敬あつくして、よろづ豊かに心のまゝにて、世界の榮花にのみふけるならはしなれば、恐れ慎む心なく、おごり日々に長じ易く、戯遊を好み、人の諫をきらひ惡む。況や學問などに身を苦めん事は、いと堪へ難くて、富貴の人のするわざにあらずと思ひ、むつかしくいたづがはしとて、うとんじ嫌ふ。かゝる故に、おごりをおさへて、身をへり下り、心をひそめ、師を尊び、古を考へずんば、いかにしてか心智をひらきて、身を修め人を治むる道を知るべきや。

一賤しき者、我が身ひとつ修むるだに、學問なくて自らのたくみには成り難し。況や富貴の人は、多くの民を治むる職分、大に廣ければ、幼き時より、師に近づき、聖人の書を讀み、古の道を學んで、身を修め人を治むる理を知らずんば有るべからず。いかに才力を生れつきたりとも、古のひじりの道を學ばずして、我が生れつきの心を以て、みだりに人をつかひ民を司とれば、人民を治むる心法をも、其道其法をも知らず、誤多くして、人をそこなひ道に背き、天官を空しくして、職分を失ふ。然れば、位高く祿重き人の子は、ことさら少年より早く心をへり下り、師を尊び、學

ばずんばあるべからず。

一凡高き家の子は、幼より下なるもの詔ひ従ひて、ひが事を云ひ、僻事を行ひても、尤なりと感じ、拙き藝をも、早く上手なりとほむれば、聞く人自らよしあしを辨へず、詔ひ偽りて譽むるとは知らず、我が言ふ事もなす事も、誠によきと思ひ、我が身に自滿して、人に問ひ學ぶ事なければ、智恵才徳の出來、進むべきやうなくて、一生を終る。是を以て、高家の子には、幼き時より、正直にて智ある人を師とし友とし、側に仕ふる人をえらびて、惡しき事をいましめ、善を進むべし。詔ひ譽むる人をば、いましめ退くべし。富貴の人の子は、とりわき早く教へいましめざれば、年長じて後、世の中さかりに、おごり習ひぬれば、勢強くなりて、家臣として諫め難し。位高く身豐なれば、民の苦人の愁を知らず、人の費我が費をいとはす。おごりに習ひては、人をあはれむ心も薄くなる。又さほど高き品にのほらざれども、時に合ひ勢に乗りては、つねの心を失ひ、人に無禮を行ひ、物のあはれを知らず、人の情をも忘れて、言ふまじき事をもいひ、なすまじき事をもなす事こそあさましけれ。幼き時より、古の事を知れるおとなしく正しき人をえらび用ひて、師とし友とし、早く



世の中さか
りに―得意
全盛の世と
なりての意

賈誼が詞に
云々賈誼
曰く、太子
の善は早く
教諭すると
左右を選ぶ
とに在り

學問をつとめさせ、身を修め人を治むる古の道を教へて、善を行はしめ、惡を戒むべし。よき人をえらびて、もし其人にあらずんば、師とすべからず。既に師とせば、是を尊び敬ひ、其教を受けしむべし。又身の養、飲食などのつゝしみを教ふべし。左右近習の人を能くえらびて、質朴にて忠信なる人をなれ近づかしむべし。必邪佞利口の人を近づくべからず。かやうの人、甚人の子をそこなふものなり。又邪惡の人にあらざれども、文盲にて學問をきらふ人は、よき事を知らず、幼少なる子の志をそこなふ。左右の人正しからざれば、父の諫、師の教行はれず。心になひたるとて、子の害になる人を近づくべからず。賈誼が詞に、太子をよくするは、早く教ふると、左右をえらぶにありといへり。是古今の名言なり。

